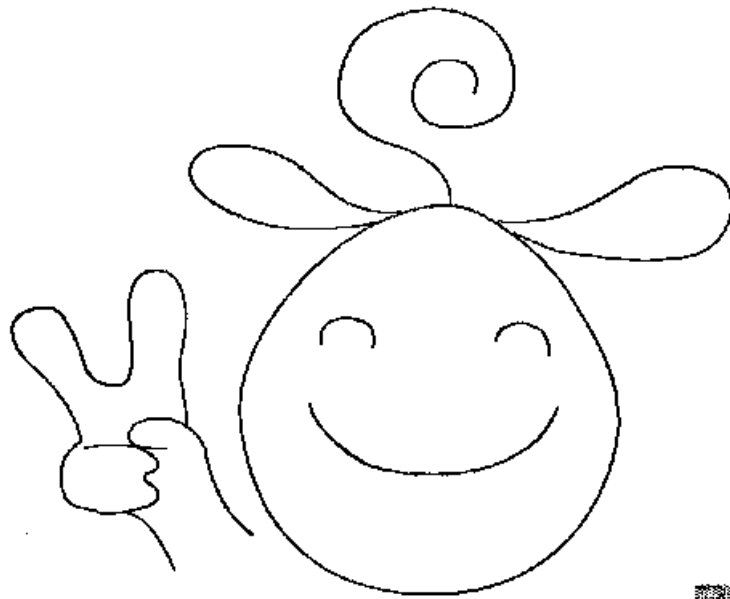
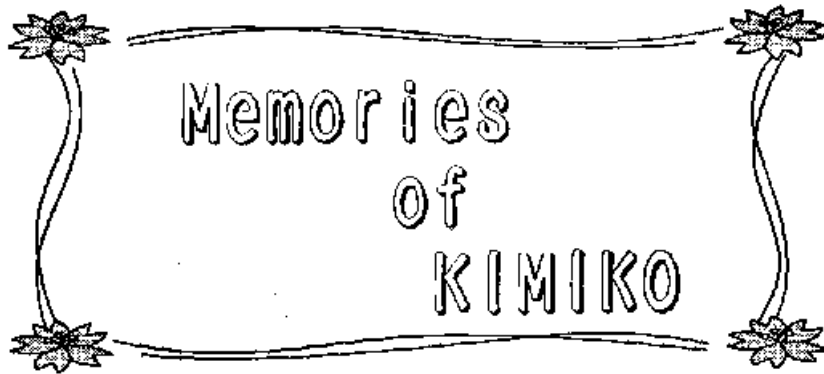




# My Favorite Betty!



風にそよぐスイートピー



by Masao Sotoma - May, 2000years

2000年 5月

前略 頬にあたる風も優しく、新緑の緑眩しく、厚着を脱ぎ捨て心も軽く、年中で一番活力溢れる良き気候となりました。

本来であれば、その喜びを皆様と分かち合い、平穏無事な当家の暮らしぶりなどご報告して、年間の音信とさせて頂くところですが、悲しみの“被災地便り”をお届けすることとなりました

平成7年の大震災以来、“被災地便り”にて皆様に当家の復興振りをご報告いたしてまいりました。厳しい経済環境の中でなんとか再興を果たし、いよいよ“完結編”をと考慮していた矢先、当家にとって考えもしていなかった凶事発生、それも最悪の事態となりました。

このことは、決して震災とは切り離して考えることは出来ず、被災地における“その後”の出来事の一つ、それも悲しい事実として“被災地便り”の中に留めて置きます。

“妻たちのことを書き始めた夫”の一人として、この文を全ての“妻”、“母”に捧げます。

- 平成12年・新緑の六甲にて -

外 間 正 甫

---

---

---

---

---

- 被災地便り・その後の外間家・平成12年・世紀末編 -

- 序 章 -

“人生には三つの坂がある”とは、よく耳にする言葉です。

希望に胸躍らし、苦しいけど光り輝く未来を信じて駆け上がる“上り坂”、どこまで下るのか、不安な気持ちと焦りの入り交じった一步を踏み出す“下り坂”、この二つの坂は長い人生の間、何度も何度も経験し、なんとか乗り越えて“その人の重み”となります。

誰もが決して出会いたくない坂がもう一つあります。それは、“まさか!”の坂です。

平成7年の“阪神淡路大震災”は、神戸市民を含め被害に遇われた全ての方にとっての“まさか!”でした。その後の被災者たちの様子は、報道等でご存じの通りです。

しかし、メディアなどの情報などでは分からない辛い、悲しい事が、この被災地では引き続きおこっております。

震災復興を胸に秘め、頑張ってきた方の突然の訃報に触れることが多々あり、地震そのものより、その後遺症がもたらす悲しい事実の方が、胸を傷めます。

悲願達成の為に、健康より日々の頑張りに重きを置き、いつのまにか病魔に蝕まれている自分に気づかず倒れてゆく、持って行く先の無い、辛い現実が繰り返されております。

二〇〇〇年を迎えることのできた当家にとっても、“運命の悪戯”と言うのか、予期もしなかった冷酷な天の采配を避けて通ることは出来ませんでした。

この一年余りの当家の狼狽ぶりを包み隠さず読者の皆様にお伝えするのは、大変心苦しいのですが、私の為でもあり、最期の最期まで病魔と闘った妻“公子”の供養となりますので、お目通し頂きましたら幸いです。

また、日頃健康管理に疎い方に警鐘となりますよう、筆者からの切実なる願いです。

ともすれば、人の命が軽んじられる現代において、これ程何事にも代えられない大切なものがあることを痛感させられた、夢中で生きた一年でした。

“いつまでも、彼女のことを御心に留めてやって下さい。”

- 合 掌 -

## - 告 知 の 章 -

前回の“被災地便り”(平成11年早春編)でお伝えしたとおり、新年の喜びをテニスで楽しみ、愛娘の成人を祝い、細やかな幸福を享受しておりました当家の様子を書き表し、皆様にお届けした頃には、すでに彼女の体は病魔に蝕まれていたとは、夢にも考えませんでした。

—昨年(平成10年)頃より体調の不調を訴え、特に腰が痛い、首が廻らない、顔がむくみだした等々、まわりの皆からは更年期だと適当にあしらわれ、余り重大視していなかった。

本人も我慢出来なかったのか、K病院の整形外科に通院して診てもらっていたが、原因を究明出来ず、場当たりの治療しか受けていなかったようだった。

当時の担当医を責める気は無いが、他の原因が思い当たらなかったのかと、今となっては不信感を抱いている。結局、的外れな治療を受けていたということになるのでしょうか。

平成10年の暮れには相当辛かったのか、よく店のソファに横になっていたのを思い出す。それでも我家業の書き入れ時で、苦しさを我慢して店に立ち、食事の用意をし、後方支援を充分やってくれた。おかげで前回レポート通り、まずまずの業績を残せた。

思いかえせば、この年にはよく“閉店時間を早くしよう。”とか、“休日はゆっくりしよう。”とか、“今日は外食しよう。”とか、果ては“誰かに店をやらしてもらおう。”とか、私に対してアピールしていたのに、再興が始まったばかりの事業にしか頭がまわらず、聞く耳を持っていなかった私の馬鹿さ加減には腹立ちを覚えると同時に、悔しさ一杯である。

家業再興に燃える私に対し遠慮もあったのか、又優しさからか、取り返しのつかない我慢をしてしまったようだ。

平成11年新春には、彼女自身がアレンジしたテニス大会を楽しみ、娘の成人を祝ってやり、何事も無くこの年を過ごせることを信じ、“被災地便り・平成11年新春編”を執筆、お届けしました。

その直後より、事態は一変。急転直下、我が家族は奈落の底へ突き落とされました。

平成11年1月後半、いよいよ体調悪化、K病院の内科にて検査、不審を抱いた内科医が更なる精密検査の必要を感じ、R病院の専門医を紹介していただく。

R病院にて内視鏡検査の結果が思わしく無く、更に精密検査の為、大学病院の紹介を受ける。

2月初旬、大学病院にて検査、中頃には本人に対し、“癌告知。それも末期と。”  
ここまでの経過は、彼女一人で病院に赴き、残酷なる告知を全て一人で受け止め、家族には告げず。どれほどショックを受け、錯乱したか想像に余るものがある。そんなところまで彼女を追い詰めた冷たい夫と謗りを受けても、反論する資格は私にはありません。慚愧に堪えない思いで一杯です。

## - 狼 狽 ・ 混 乱 ・ 錯 乱 の 章 -

やがて家族全員が知ることとなり、とにかく望みを捨てないで治療に専念させる決断を下し、早急に入院手配をする。

大学病院と折衝の結果、平成11年3月10日（水）入院。

翌日、担当医N先生より病状説明と今後の治療の説明を受ける。前もって先生より、本人に全てを告知しても良いかとの問い合わせがあったが、本人は全てを知りたいという強い意志を示し、二人で説明を受ける。

レントゲン写真、CT写真などを目の前にしての、先生の説明。

『左肺部分にゴルフボール大の腫瘍が出ております。これについては、空洞部ですので急いで処置する必要は無いでしょう。脳の中にも転移が見られ、これが多少の言語障害をもたらしているのでしょうか。頸椎部と腰椎部の転移が、腰痛や首の回らない原因です。右大腿骨にも転移が見られます。はっきり申し上げて第 期です。余命については、月単位でお考え下さい。急がれる治療としては、脳内の腫瘍拡大を防ぎ、頸椎、腰椎の放射線による処置です。但、頸椎部、腰椎部の放射線照射は骨の破壊を意味し、どちらも重要な神経が通っており、頸椎骨折による即死、腰椎骨折による下半身麻痺が予測されます。脳部分への照射による正常細胞の破壊による後遺症も考えられます。

とにかく出来るだけのことはやって見ましょう。ただ、完治する病気ではないことを、ご確認しておいて下さい。』

優しく言い含めるような説明を受け、癌に対する知識が無知に等しかった私は、恥ずかしながら何だかホット安堵し、夫婦共々先生に全てを託し、治療をお願いした。

帰宅する車中のなかで冷静になって考えてみると、優しい言葉遣いであったが、はっきり「死の宣告」を受けたのである。

なんと残酷な宣告。それをはっきり確認した彼女は、どれほどショックを受け、嘆き悲しんでいることか。私自身も、言われていることの意味が痛烈に胸に突き刺さり、家に帰り着くのがやっとであった。

家族には、どう説明したらいいのか思い当たらず、特に同居している彼女の母には言葉が無かった。

とにかく一人になりたくて店の事務室に閉じこもり、もう一度じっくり先生の説明を一字一句思い出し、どこか自分勝手に解釈して悪く考えているのではないかと、無理矢理自問自答してみるが、その事実を覆すようなところはなく、夢でなく厳しい現実であることを自覚した途端、今まで押さえていた思いが堰を切ったように溢れだし、大粒の涙と共に大声を出して泣いてしまった。初めて経験する慟哭である。

「公子。公子。済まない。済まない。なんて馬鹿なことをしてしまったのだろう。」

悔やんでも悔やみきれない。恥ずかしながら、我が人生最大の悔いである。

永遠に続くかと思った、眠れぬ夜の始まりである。

平成11年3月14日(日) 長女やよい、複雑な思いでテニス合宿へ。

平成11年3月15日(月) 放射線治療始まる。

当時の当家の混乱振り、特に私の狼狽振りは相当なもので、その凄まじさは、今思い返しても、逆毛立つ思いである。

地震の影響で風呂場の水漏れひどく大工事になり、再々の銭湯通い。(公子も一緒)税金の申告時期が迫り、あたふたと決算をし、書類作成。(入院前日迄、公子が担当。)下宿が3部屋空き、その下宿人募集のため、あちこち奔走。

経理責任者である家内がリタイヤーし、急遽私に全ての仕事が回ってきたが、今まで任せ切りのため何も分からず、余裕の無かった店の支払いの金策、当家の財政事情、資金繰り、銀行折衝、小切手や手形の切り方、下宿人へのランニングコストの請求の方法、下宿人入れ替えの世話等々、未知の業務を必死でこなしたが、テンションがハイな毎日で、よく体がもったなあと感心する程であった。

片や一縷の望みを持って治療に専念している家内のことも心配で、仕事も中途半端になり、重くのしかかる重圧に押し潰されそうになるプレッシャーを強く感じながらの毎日であったが、皆がよく支えてくれた。

そんな日常であったため、充分見舞にもいってやれず、随分寂しい思いをさせたことだろう。

今まで経験したことのないような強度のストレスを感じ、食事も喉を通らず、自分の疲労度もピークに達し、訳の分からない極限状態に陥った。

いつのまにか65kg程あった体重が55kgまで落ち、精神のバランスも崩し、とうとう医者助けを求めることになり、通院。

極度のストレス状態との診断で、精神安定剤をもらい、それに頼る事態に陥る。

必死で闘病している家内のことや、店の事情を考えると、今私が倒れると、それこそ一家全滅の憂き目に遭うという悲壮感が私を鞭打ち、仕事に駆り立てた。

いい時には、自分のペースで仕事が出来るという良さのある個人商店だが、一旦事があると、どうしようもない危険な状況に陥る苦しい体験を、いやと言うほどした。

重々分かっていたのだが、いざ直面してみると、その混乱振りは想像を絶するもので、混乱というより錯乱状態と言った方が当たっている。

自分のことばかり書いたが、死と対峙している家内の方が、もっと心穏やかではなかったはずだ。見舞いに行けない時には家内からラブコールが有り、まだまだ元気にいるということが、どれだけ私を救ってくれたことか。

3月20日 やよい合宿から帰るが、ストレスから寝込み、病院通い。

(†) 可哀想に、上記のような事情のため、こちらも一人で通院治療。

我が家の不幸に、何度天を仰いだことか！

4月4日 放射線治療(20回)後、初めて見舞い。抗ガン剤投与も始まっていたため、坊主頭になっており、思わず頭を撫でてやった。

本人曰く、「髪の毛が抜けるのを見るのがいやだから、髪切ったわ。」

いかにも彼女らしい思い切りの良さである。

「感染症が怖いから風邪引きの人、お断りよ!」と、優しく言う。

いつも病院に行くまでの車中では、弱っていたらどうしようと不安一杯でいらざる心配をし、駆け足で病室へ向かい、元気な笑顔を見ると一安心する。

明るい表情を見ると、完治するものだと思い込み、ルンルン気分になる。

ママには申し訳なかったが、未熟者の事務員の私は各種帳簿類を持ち込み、さっそく事務引き継ぎの打ち合わせに入る。

「私の大変なのが、良くわかったでしょう!」と、おしかりを受ける。

「まったくその通りです。よくやって頂きました。」と、頭を下げる私。

第一回入院(3/10-5/2)を終えるまで、悲喜こもごも織り交ざった気持ちの揺れがあり、彼女も躁鬱を繰り返し、時には激昂する妻になり、時には子供を心配する優しい母になり、大きなうねりの中に小さな感情の起伏があった。

この頃の私といえば、営業に出る車中で「死ぬなよ!死ぬなよ!生き延びろよ!」と念仏のように唱え、日頃開けたことのなかった仏壇を開き、ご先祖様に向かって、「どうか長生きできますように!」と手を合わせ、勝手な仏頼み、神頼みをする。

高層のマンションの廊下を歩いている時など飛び降りそうな衝動に駆られることがあり、自分の行動が制御できない恐ろしさを感じ、急いで帰宅、心を落ち着けることがしばしばであった。自分の小心を嘆いたが、如何ともしようがなかった。

4月末 主治医より家族全員の呼び出しが有り、赴く。家族一同の前で説明。

「当面の処置は終了しました。このまま入院を続けられてもいいのですが、出来る限り家族一緒の方がいいではありませんか。ホスピスも紹介しますよ。どうされますか?」

勿論異存など無く、在宅治療を希望。通院治療の継続もお願いする。

「頭部の腫瘍は、効果が有り縮小しております。腰の部分も痛みが和らいだようです。肺の腫瘍も縮小し、効果が認められます。家庭内では、骨がもろくなっているのです。転倒などによる圧迫骨折に充分注意し、階段など手摺りを取り付けてください。抗ガン剤の副作用による、白血球、赤血球の減少による感染症が怖いので、できるだけ人混みは避けて下さい。悔いなきよう家庭生活を楽しんで下さい。ただ、抗ガン剤使用は、予測出来ない副作用があり、かえって余命を短くする可能性があるのです、医者としてお奨め出来かねます。」

会話の中で、家内がいらざる延命治療を拒否したことには、動揺を覚えた。

彼女らしい潔さではあるが、家族としては承服できるものではなく、まだまだ希望は捨てていないので、でき得る限りの手立てをお願いする。

5月2日 喜びの退院。家内は勿論、家族一同どれだけこの日を待ち侘びたか。

(日) "ママ、ご苦労様。よく頑張ったね。"と、声をかける。

長い入院生活で多少足腰が弱っていたが、しっかりした足取りで帰宅。

"ただいま、やっぱり家がいいわ。" 開口一番そう言い、嬉しそうな表情をする。

また家族が揃うことができ、本当に嬉しかった。

余命のことなど考えたくなく、一日一日をどれだけ充実させるかに、心を傾ける。

その夜、家内にとって初めての新装内風呂に入浴。

"気持ちいい! 極楽! 極楽!" 本当に嬉しそうだった。

5月12日 自宅に帰ってリラックスしていたように見えたのだが、入院中のストレスをその

(水・深夜) まま引きずっていたようで、暫くすると様子がおかしくなり、夜中に叩き起こされ、

病院へ連れて行けとせがまれる。容体の悪さが分からず、とりあえず大学病院の

担当医局へ連絡するが、あいにく担当医が不在、朝まで待てとの指示を受ける。

見る見る内に顔色が悪くなり、意識も薄らぎ、一秒も待つことができなくなり、

119番通報。そのまま大学病院へ。

5月13日 大学病院へ緊急入院。重体とのこと。最早これまでかと、気が動転。

(木) 家内が処置を受けている間、私も体調が極度に悪くなり、診察を受ける。

やがて処置も終え、病室に移された家内を見舞い、担当医の説明を受ける。

"服用しているステロイド性潰瘍、ストレスによる胃潰瘍、十二指腸潰瘍です。

極度の貧血で輸血が必要です。癌とは直接関係ありません。

問題は無いとは思いますが、念のため輸血の同意書を書いて下さい。

下血、吐血などの症状があったと思われませんが、気がつかなかったのですか?"

ああ、なんということだ! あれ程帰宅を喜んでいたのに、神経までおかしくなっていたとは! 側にいても何の役にも立っていなかったことが、悔しくて堪らなかった。

段々と、この病気のもたらす底知れない恐ろしさが分かってきた。

この時期の入院が一番精神状態が悪く、常日頃の義憤を書きなぐり、私にも辛く当たり、悲しみを倍加させた。明日をも知れない生死の間で、薬漬けの毎日を送り、避けることのできない運命を待つだけの日々、誰にも分かってもらえない辛さ、常人の想像を絶する地獄であったろう。

このことは、ある程度冷静さを取り戻した現時点での分析であって、当時のエンドレスな苦悩の中の私は、とても人のことまで慮ることはできなかった。

2回目の入院(5/13-6/6)も、結果良好とのことで退院することとなった。



6月6日 退院。10時に迎えに出向く。昼食をコムシノワで取りたいとの願いで行ってみるが、あいにく開店前で願い叶えず。足元もおぼつかないので、急いで帰宅。病院食に飽き飽きしていたのか、ポエムにてサンドイッチを買うと、大層喜ぶ。グルメの街神戸で育ち、人一倍食い意地の張っていた家内は、食事制限のあった今回の入院では、ベッドの中であれこれと食い道楽の算段をさせていただこう。

今度こそ、慎重に、大事に、大切な日々を共に暮らさなくてはと、本人は勿論見守る家族一同の願いは、言葉に出さなくとも、心に秘めた思いであった。家内は心の整理ができたのか穏やかになり、今まで通りの“妻”、“母”、そして“主婦の座”に戻り、細々とした家事労働をこなし、家庭としての形がもどり、家族が一緒であるという当たり前のことに、大きな幸福を感じた。

とはいっても体力的なものもあったので、お手伝いとして家族全員が駆り出されることになり、レンジ廻りの掃除、食事の後片付け、風呂掃除、庭の手入れ、買い物、お洗濯などなど、その雑務の多いこと。誰もが文句も言わず喜々として参加します。家事に疎かった私は、その労働量の多さに驚き、家内の場合は、これに店運営の手伝いやマネジメント、下宿の世話など、元気な時にはこなしていたとはいえ、労働超過はすごいものであると初めて認識した。

体力的にも、精神的にも来ていた限度が、家内の悲鳴になっていたのだろう。凄いストレスであったろう。いっそのこと、全てを投げ出し、逃げ出してくれていれば、もっと早く軌道修正ができ、こんな悲劇的な結末にはならなかつた。家内の人となりを知っている人であれば、その責任感の強さ、マネジメントのうまさ、我慢強さ、仕事のこなし方は全て一級品であったと評価されるでしょう。それが仇になってしまったことが、大変残念だ。

家内が自ら“ガンファイター”と称して、闘病日記“病勝日誌”の第1ページに記してあったこと。

第1目標	平成11年12月31日	(家内のバースデー)
第2目標	平成12年3月	(淡路花博)
第3目標	平成12年3月10日	(闘病一年目)

“告知”を受け、“宣告”を受けた家内が、“生きる”意欲を見せた目標。一旦希望を捨てかけ錯乱、悲嘆に暮れていた彼女が、健気にもファイトを剥き出しにし、生きる喜びに目覚めてくれた。

“ガンバレ、公子！ ガンバレ、ママ！”である。

我が家族は、目標に向かってフルパワーである。

## - ストレスに打ちのめされる章 -

2 回目の退院以降家内の方は、病状の大した変化も無く、その生活を楽しんでいた。見舞いの方々とも笑顔で接し、旅行は無理であったが、行きたいところへはお供とともに、よく出掛けたりしていた。食い道楽の夢も、果たしていたようだ。

この章では、家族の様子、特に私のことも記してみたい。

辛い思い出のある方には悲しい思いをさせるかもしれませんが、“不治の病”の病人を抱える家族が、こういった心理状況、精神状態になるか記しておきます。

前章で記しました通り、常にストレスを感じており、テニス、ゴルフなど気分転換を図っておりましたが、決して通常には戻らず、鬱々とした日々を送っておりました。

店の夏期休業のある日、家内の希望で“オルセー美術館展”を見学することになり、娘と3人で出かけた。とても暑い日で、その熱気に体調の不調を感じながら入館。寒さを覚える程の冷房と薄暗さに神経を痛めつけられ、人混みの中で家内の先導をし、ゆっくりペースの娘を気にしながら、うろうろする。

その不調がピークに達し、あわてて美術館を後にする。

とても食欲などなかったが、女性陣の希望で山手のレストランへ。

オーダーして待っている時、突然言いようのないうっ血感、カーッと頭に血が昇るような不快感と共に嘔吐感をもようし二人を残して、急いで帰宅。

冷たい風に当たり、氷を包んだタオルで首筋、頭を冷やし、精神安定剤を飲むが、一向に収まらず。横になって目を閉じると、更に悪化。得も知れない苦しみに、悶える。

いよいよ私も終わりかなと、不吉なことを考えたりもしたが、意識はしっかりしており、不快感だけが身悶えさせる。やがて2人も帰宅、看護をしてくれるが、良くならず。とにかくその夜は、自宅待機をして様子を見ることにした。

翌朝、医者嫌いの私も、とても堪らずとうとう病院へ。

血液検査、触診などを受けるが、原因不明。医者によると、“一過性の自律神経失調症”との診断で、またまた精神安定剤をもらう。内科診断では、何も無いとのこと。

翌日もどうしようもなく、又病院へ。血液検査、胸部レントゲンを取るが分からず。不安はつのも一方で、先生に訴えると、“何も出ないと思いますが、CTを撮ってみますか”と準備をしてもらうが、土壇場で拒否。自分自身がどうなっているのか、冷静に出来ない非常に混乱した精神状態である。ストレスによる神経過敏になっているのか首に異常を感じ、その翌日には今度は整形外科へ行き、レントゲン診断や触診を受けるが、これもいたって健康です、異状なしとの判断。一体どうなっているのか、もう目茶苦茶である。残るは、精神科のみである。これにはかなり抵抗があり、我慢して自分で自分を叱咤激励するしかないと思い、自分なりの闘病に入る。

全て強度のストレスがなせる業なのだろうと、納得させる。

精神病一步手前のどうしようもない自分の苦しみを家族に打ち明ける訳にゆかず、心配顔の家内には“疲れが溜まっているだけだ。”と、苦しい弁明をする。

この苦しい状況を一人で抱え込むことができず、とうとう親しき人に打ち明け、心の支えになってもらう。打ち明けられた人にとっては、余計な心配事を聞いた事になり、大変ご迷惑をお掛けしたとは思いますが、止むに止まれず助けを求めた。お許しあれ。この酷い状況は、秋風の吹くころまで続いた。

一方長男の方はというと、家内の入院が決まった時点で静岡より帰省させ、私の片腕、店のサポート役にする。

家内の病状がはっきりし、余命いくばくも無いと分かると、私より説明。

“僕は、平気やで。”と、一言。どう平気なのか、推し量れなかった。万事能天気なところがあり、遠くの地で放し飼いにしていたのが家族との絆を薄くしてしまったのか、その物言いに二の句が継げなかった。似た者同士と言うか、家内にはちょっと反発しており、我が子ながらつかみ所なく、頼りになるものかどうか心配であった。

その長男も、私同様ストレスからテンションがハイになり、体調の不調を訴え、密に病院通い、詳しくは言わなかったが、こちらも精神安定剤のお世話になっらしい。

自由気ままな生活から、一転抜き差しならない束縛を受け、ストレスを感じない訳は無い。彼も人の子、ある意味では自業自得ではあるが、人非人ではなかったようだ。

家内もよく長男の文句を言っていたが、やはり可愛いのか入院中にお気に入りの看護婦を見つけては、お相手にどうかと画策していたようだ。さすがに母である。

長女“やよい”は、当初一度はストレスで倒れはしたが、その後しっかり現実を見詰め、悶え苦しむ男どもを尻目に大奮闘。学業の傍ら、家内のケアをし、店番もし、つとめて明るく振る舞い、決して家庭内を暗くしまいと頑張り、随分救われた。

よく耐えているなあと、感心させられることがしばしばであった。芯の強い子である。

しかし、全員がダウン寸前のところを救ってくれたのは、なんといっても家内の気力である。決して楽なはずはないのに、持ち前の陽気さを取り戻し、家族に笑いをもたらし、一時でも病気のことを忘れさせ、皆の気持ちを楽にさせたくれた。

日中の暑さもおさまる頃から暮れにかけては、以前のような平穏な生活に戻り、気持ちの上で家族それぞれの身を案ずるような余裕もでき、心置きなくおしゃべりができた。とはいえ、仕事人間の私は家内にべったりとはゆかず、夜半まで残務処理をし、帰宅は深夜になる。生活のリズムの違いはこの何十年來のことで、家内も万事承知で常に先に就寝。その分娘が相手をしてくれ、余り寂しい思いをさせなかったと自分勝手に思っている。短い期間ではあったが、やっと夫婦らしい落ち着いた会話が出来たのもこの頃で、充実した良き日を送れたことには、運命の神にも感謝している。

年末には、諦めかけていた運転免許証の更新にも出かける。

益々生きる意欲を見せてくれたことに、心のなかでエールを送る。

平成12年の新春を祝う頃には、皆まったく平常に戻っていた。

## - 嵐の前触れの章 - (2000年新春)

無事に第1目標の12月31日もクリアして、2000年の正月を家族で祝い、奇跡がおこりつつあると喜び、“告知”のことなど意識から大分遠のいていた新年であった。

家内が昨年より希望していた白内障の手術(入院)予約が1月19日と決まっていたので、軽い気持ちで大学病院へ入院する。

若い頃よりコンタクトレンズを使用していたため、白内障を患うのも早く、左目は殆ど見えていなかった。好きな洋画ビデオも楽しめず、本も読めずちょっと寂しそうであったが、その悩みも解消できるとあって、ある意味喜々として入院した。

この入院が、嵐の前触れとなった。

1月19日(水) やよいのお供で入院。

1月25日(火) 左目手術。医師の勧めで、右目も手術することになる。

2月3日(木) 右目手術。

2月7日(月) 家内より連絡。内科検診でひっかかり、入院長引くとのこと。病室を替わる。不安がよぎり、またまた精神状態が悪くなる。

2月10日(木) 主治医N先生より呼び出し。家内と二人で説明を聞く。

“レントゲン撮影の結果、次のような病状の変化が見られます。

心臓のまわりの心嚢部に約1センチの厚みで水が溜まっており、心臓を圧迫しています。昨年末頃より、しんどいと言っておられたのはこの為です。

このまま放置しておれば、心不全で命を縮めるかも知れません。早急に処置する方がいいでしょう。原因は不明ですが、処置自体はそれほどの大手術ではありません。馴れたスタッフがいますから、30分程度で終わります。

肺部分に転移が見られます。頭部の転移も多少出て来ているようです。

処置後抗ガン剤を注入して様子を見てみましょう。

この変化は、昨年11月のレントゲンとの比較で判明したことです。”

ある程度のことは覚悟していたが、またもや強烈なショックを受ける。

延命治療を拒否したとはいえ、家内も医者 of 勧めに応じ承諾した。

2月14日(月) 心嚢ドレナージ手術にて水を抜く。(約800) 家内の妹が立ち合う。

手術成功との連絡を受け、ほっとする。

悪い時には悪いことが重なるもので、同居してた家内の母も胃潰瘍手術のため、同じ病院へ当日入院。一体どうなることやら、私は途方に暮れる。

家内の姉、妹が応援に駆けつけ混乱を収めてくれ助かったが、昨年のような大混乱の状態に、またもや天を仰ぐ日々となった。

2月20日(日) 手術後初めての見舞い。おばあちゃん(家内の母)と、やよいと3人で。  
鼻から酸素吸入を受けており、一瞬どきっとするが、元気であった。  
心臓の負担が軽減したのか、あまり倦怠感、疲労感を訴えなくなっていた。  
2月21日(月) おばあちゃん、入院。

2月22日(火) 主治医よりの説明を受け、今後のことを話し合う。(家内、やよい、小生の3人)  
“ 抜き取った心嚢水の検査の結果、ガン細胞が検出されました。  
抗ガン剤を注入いたしました。恐らく効果はないでしょう。  
このまま入院を続けておれば、寝たきりになるの可能性大で、家族との生活を大事にされることを、お奨めします。  
在宅ケアの不安を感じられるのであれば、ホスピスを紹介しますが、  
勿論通院治療も続けていただき、主治医としての責任は持ちます。”

いよいよ終局を迎える予感がし、病院やホスピスに預けるなど考えられず、  
本人も在宅を希望。在宅ケアの大変さの説明を受けるが、これ以上寂しい思  
いをさせることは、とても耐え切れなくて退院を願い出る。

2月25日(金) 3度目の退院。覚悟を決めなくてはと思うが、反面奇跡が起こることを  
信じ、複雑な心境で連れ帰る。家内も言葉少なし。  
予想以上に足腰弱り、歩くことに介護が必要となっていた。  
この日はおばあちゃんの手術日であったが、家内の姉妹に任せきりで、  
そこまで気を配ることは出来なかった。

これから起こるであろう事態は予測不可能であったが、出来得る限りの  
ことはしてやろうと心を決める。家族一同、皆同じ思いであったろう。

主治医の計らいで、在宅応診のための新型テレビ電話設置、酸素濃縮器の  
設置、血中酸素濃度測定器が持ち込まれ、当家にあった血圧計、体温計など  
家内の枕元に置き、寝室が病室となった。

家の中でもよく転ぶようになり、一度など頭をひどく打ちつけ、家族を  
心配させた。見ていると、足が意志に反して思うように進まず、せっちな  
家内の上半身だけが前に行き転倒する。ひとときも目を離すことができず、  
一対一の介護となる。

トイレなどと言いだすと、家族の誰かが前に立ち肩をもたせ、子供の頃に  
よくやった電車ゴッコの態勢をとる。“ 出発します！シュッシュ、ポップ ”  
家内も喜び、一体感に笑いが出る。緊張の中にも、ほぐれる一瞬。  
この頃には、食も細くなり、気力も半減したのかと心配を募らせる。

3月 6日(月) 私が一人で店番をしていると、「背中が痛い。」と、家内より電話。激痛が走るのか、顔をしかめる。他の家族が不在で、少々慌てる。急いで病院に連絡し診察をお願いするが、同行する者がいない。子供たちを携帯電話で呼び出し、帰宅を促す。急ぎ帰宅した娘と共に、病院へ走らせる。

診察の結果は、腰椎部に骨の損傷があり神経を圧迫し、痛みがでていたとのことで、鎮痛効果のある座薬及びシップを貰い帰宅。

週一回の通院で容体を診てもらうが、体調の波が激しくなっていた。手術した眼の調子ももう一つで、不調を訴える。正に、満身創痍である。

店も気になるのか、店までの下り坂をふらつく足取りで歩く後ろ姿を見ると、堪らなく哀れを感じ、思わず抱きかかえる。  
“わたし、一体どうなるの？” その言葉にどきっとさせられ、  
“大丈夫、心配せんでもいい。”とは答えるが、二の句が継げなかった。

3月10日(金) 第3目標の1年目の“3月10日”も、なんとかクリアできたが、お花をこよなく愛していた家内の願いである第2目標、“淡路花博・ジャパンフローラ2000”見物の約束を果たすのは体調を考えると、残念ではあったが、私の独断で断念させた。道中の体調の変化は充分考えられ、もしものことがあればと思い、悔いは残るがそう判断した。

この頃には、倦怠感、疲労感、痛みなども再々訴え、後程判明することだが、またもや心嚢水が溜まりだし、心臓を圧迫し始めていた。

3月24日(金) 家内の指導のもと、出来上がった消費税確定申告を提出する。病床に伏してるとはいえ、まだまだ経理担当としての意識が強く、提出すると、落ち着いた様子を見せる。

3月26日(日) 長年仲良くして頂いている方とのテニスの日で、家内の希望でコートへ。病気発見後処置をしているので、とてもテニスなど出来る体ではなく、笑顔を見せて見物するだけ。どんな思いで見っていたのだろう。  
おばあちゃん、退院。

3月30日(木) 大学病院診察日。私と娘、同行。かなり苦しそうで、主治医に自宅近くの病院(ホスピス)を、すすめられる。

4月 2日(日) 再びテニスの日。仲間の顔を一目見たかったのか、家内とコートへ出向く。

この章を書くに当たっては、これまでの沢山の思いが込み上げてきて、思うように筆が進まず躊躇いたしました。愛する人の死までに至る姿を飾る事なく、心して記します。

4月 3日(月) 深夜3時半 突然ひどい嘔吐に襲われ、苦しみだす。

あわてて抱きかかえ介抱するが、苦痛、呼吸困難を訴える。

応急手当の薬、知識など無く、冷たい氷水を飲ませ、背中をさすり、落ち着かせる。小一時間もするとなんとか落ち着き、暫く様子を見るが、息苦しそうで、痰が喉につまるのか言葉が出ない徒ならぬ容体になっていた。

“朝まで待てるか”と聞くと、弱々しく“うん”と頷く。

暫く沈黙した後、か細い声で、“わたし、死ぬかも。”と、照れたようにつぶやく。私に対する遠慮か、彼女らしい優しさで表現する。

元気な時には、冗談で“死ぬまで、生きるわ”と言葉の遊びをしていたが、この頃には誰もが口にするのを避けていた言葉、特に絶対に言うて欲しく無かった家内の口から出たことには、大いなる衝撃を受け、受け入れられなかったが、“運命の日”が間近であることを覚悟しなければならなかった。

とはいえ、二人して涙するなどとんでもないことで、その気持ちを強く打ち消し、“朝一番に、N先生に連絡するから、安心して、横になり。”と、床に着かせる。横にはなるが、隣の家内のことが気になり、一睡も出来ず。

4月 4日(火) 朝一番、主治医N先生に連絡する。病状を説明し、判断を仰ぐ。

“緊急を要するので有れば、お近くのR病院に入院手続きをすぐします。7日が大学病院の診察日で、それまで待てるようであれば、こちらで入院の用意をしますが、待てますか？”

先生は、状況が全て理解出来ていたようで、こちらの無理な依頼には応じようとしておられた。家内も先生には絶対の信頼をおいていたので、大学病院の方を希望し、“待てます。”と回答。一旦は、それで電話を切ったが、かなり苦しそうであったので、私は再度“本当にしんどくない？絶対我慢するなよ。”と聞くと、弱々しく“やっぱり、しんどいかな？”と本音を吐く。

ふと、頭に焼きついていた、当日の朝の家内の行動の痕跡を思い出す。

日課として朝7時頃起床、軽く口に物を入れてから薬を飲むが、当日はパンをひとかじりし、テーブルの上には薬が散乱し、普通では無いことが一目でわかり、とても一時たりとも在宅では無理であると強く感じ、本人の希望がどうあろうと、即入院させるつもりであった。家内も覚悟していたのか、最期を迎えるのであるなら、当初から絶対的に信頼し尊敬していたN先生のもとでと思うのは、よーく理解出来たが、とてもそれまでは無理と判断し、再度連絡、R病院への緊急入院をお願いした。

先生も快く承諾、R病院への手配をして頂く。

4月 4(火) N先生より、入院手配完了との連絡を受け、準備をさせる。

出発までの暫しの間、母親と言葉を交わし、力無き手でルージュを注し、それを幾度も落とし、待ち構えている運命に従う覚悟か、パジャマの上にガウンだけを羽織っただけで、午後3時頃出発。見るに忍びない姿であった。

R病院にて、今回の主治医U先生と面談、これまでの経過説明をする。

U先生とN先生は大学病院での同窓で、家内の件は全て連絡を受けているらしく、すぐに今後の処置について打つ合わせをする。

レントゲン撮影、血液検査、エコーによる検査を緊急で受け、夕方治療方針を決める。

“はっきり申し上げて、日単位の余命かと思われます。今日、明日とは申し上げませんが、レントゲンの結果、かなり心臓まわりの肥大が酷い状況です。このまま放置すれば、心不全で一週間も持たないでしょう。

とにかく、早急に心嚢水の抜き取りをしましょう。” 承諾する。

女医であったが、変な期待を持たせずストレートに物言いをされる。

今回は家内を交えず、もっとも苦しさも極まっている容体ではとても正常な判断などできる分けなく、全て私の決断しか残されていなかった。

その他の詳しい症状は、分かり次第説明を受けることとなった。

明日ホスピスの担当者と面談してもらうので、来院せよと要請をうける。

夕方、個室にはいていた家内を見舞い、手術の説明をする。

希望に沿えなかったが、入院したことに安心したのか笑顔を見せ、希望を捨てていない私の強い気持ちを伝え、退室する。

もう全て分かっているのか気力も萎えている家内の気持ちを、どうすれば持ち直してくれるのか考えあぐねていたが、とにかく深刻な顔を見せまいと、心とは裏腹ではあるが、笑顔を決やさず接してやるのが、大事であった。

4月 5日(水) 朝よりホスピスの担当医と面談。ホスピスとは、直接的な医療をするところでは無いことを初めて知る。

“ホスピスとは、患者の痛み、苦しみを緩和するための対症療法をするところで、患者は勿論、家族のケアをもちます。心の準備をするところです。”

否応無しに最終的なところに立たされていることの実実にショックを受け言葉も無く、暫し放心状態になり、施設の案内も受けたが、気も漫ろであった。

病室へ帰ると主治医が待っており、手短かに説明。

“午後より処置をします。ご主人は病室で待機しておいて下さい。”

詳しい手術の日を聞いていなかった夫婦共々心の準備が出来ておらず、一瞬固まってしまい、何が何だか分からずじまいに物事が進んでいた。

それ程、深刻な事態になっていたのだと思い知らされる。



4月 5日 午後1時半、家内手術室へ搬送。手を握ってやるが、お互いに言葉無し。手術室へは入れず、病室で待機する。それ程厄介な手術でないことは聞いていたので、安心感からか、ついうとうとする。

2時過ぎ頃、看護婦に呼び出される。スワツ何事と応じると、手術室から電話で、先生より緊急事態発生とのこと。

“ 前回の開口部を開いたところ、癒着が激しく、手術の続行できません。手術を継続するためには、肋骨の一部を切断する必要があります。呼吸不全を起こす可能性もあり、酸素吸入器を常時着用しなければならぬ事態もおこります。このまま手術を中止しても良いのですが、ご家族の判断を仰ぎます。ご決断下さい。”

受話器を握ったまま、混乱した頭の中を整理しようとするが、定まらず。

“先生なら、どうされますか？”と、ちょっとピント外れの質問をする。  
“ 中断して、水の溜まった状態にすれば、心不全の可能性大です。私の判断より、ご家族の決断を優先します。いかがされますか？”

一刻の猶予も無い差し迫った窮地に追い込まれ、一瞬家内の言っていた“ 延命治療 ” 云々の言葉がよぎったが、どんな姿形になろうとも、生きていて欲しい願いが切であったので、続行をお願いする。

看護婦の“ 家族を呼んでおいて下さい ” との言葉に更に動揺、あわてて娘を呼ぶ。手術が終わるまで、生きた心地がせず、時計ばかり見ていた。

午後4時前手術終了。集中治療室へ移される。

病室で執刀外科医から説明を受ける。娘同席。

“ 癒着が酷く、ああいった手術になりました。心嚢水は抜くことが出来ましたが、これまでの経過をみれば、また溜まる可能性があります。今晚出血が酷ければ、輸血の必要があるでしょう。様子を見て診みましょう。” 外科医らしくはっきりものを言い、数分で出て行かれた。

続いて、主治医のU先生の説明があった。

“ 当初は、簡単に済むと思い局部麻酔をしましたが、事態が変わり急遽全身麻酔を致しましたが、充分効果がなく、暴れました。痛い思いをさせました。緊急を要しましたので、ご了解下さい。

発熱の原因ともなりますので、心嚢水を抜くための管を抜くのがベストなのですが、また溜まるでしょう。次回手術をすることは、もう体力的にはもう持たないでしょう。このままにして置きましょうか？”

異議を唱える余地など無く、意に従うしか無かった。

この時期には、家内自身生きる喜びなど感じていなかったかも知れないが、私はまだまだ生に執着しており、残された手立てを信じていた。

術後の処置が終わったのことで、集中治療室へ入る。  
苦しい息の中で一言。"もう逃げよう、こんな病院。連れて帰って。"  
よっぽど辛い思いをさせたのだろう、"済まない!"と、心の中で詫げる。

"もう楽にさせてやればいいのか!"、"否、まだまだ死なせてなるものか!"と、  
二人の私が心の中で争い、逃げ場の無い苦しみを味わったが、今迄の人生  
全てを否定するような考えには到底同意できず、プラス指向に徹した。  
4/10頃まで、意識朦朧状態が続き、家族に対する反応も悪かった。

4月10日(月) 集中治療室より、病室へ戻る。まだ意識状態が悪かった。

主治医より、親族、親しい友人など、今のうちに面会しておくようにと言わ  
れる。考えたくない深刻な事態が刻々と迫っている恐怖感におののく。  
その夜、何人かの人に連絡する。

この2~3日で意識も大分戻って来て、簡単な会話ができ、辛いながらも  
家族の時間を持たた。

やよい:(桃の花を見せて)"ママ、これ何?"

ママ : "さくら"

やよい: "違うよ、桃、モモの花よ。"

ママ、少々困った顔をする。視力低下が著しく、見えていない  
ようであった。それでも、娘がニコッと笑いかけると、同じよう  
にニコッと笑う。

全くの寝たっきりで、心嚢水を抜く管も着けたまま、排尿の管も着けたまま、  
心臓の動きを監視する装置も装着し、決して家内の望んでいた状態ではな  
かったが、生きているという事実に、家族みんながどれだけ救われたか。

4月13日(木) U主治医の要請で家族が呼ばれ、病状説明を受ける。

"心臓圧迫の原因の心嚢水はほぼ抜けておりますが、まだ毎日約30cc出  
ています。ドレンの管を抜かない方がいいでしょう。"

レントゲン写真を見て頂くと分かるように、既に肺全体をガン細胞が  
覆っています。肺機能の極端な低下が他の機能の酸素不足を起こしつつ  
あります。頭部の転移もかなり見られ、言語障害、識別能力の低下、他の  
障害も色々出て来ております。由々しき事態は、呼吸中枢の破壊で、いつ  
呼吸が止まるか分からない状況になりつつあります。いかなる抗ガン治療  
も、全く無意味です。残念ながら患者さんとの接する時間が短く、ご本人  
の希望する最終的な対症療法を確認出来ておりません。

ご本人及び、ご家族のご希望をお聞かせ下さい。"

要約すれば、こういう事である。

『近々予想される呼吸困難以外の症状に対する治療は全く無駄で、そういう容体になった時に延命の為、人工呼吸器を着けるかどうか選択せよと、決断を迫られたのである。人工呼吸器装着は苦痛を伴い、延命できたとして2、3日のことであろうとも言われた。』

やっと意識も取り戻し、消えかけていた家族の淡い希望も再び出て来ていたのに、冷酷無慈悲ともいえる最終通告。

悄然として、悲痛なる選択をするため病室へ家族が集まる。

なかなか切り出せなくて、暫く無駄話をする。

意を決して、家内へ説明を始める。

私：“ママ、(病状が)今は落ち着いているが、今後呼吸困難になるかもしれないので、その時には、人工呼吸器をつけたいか？”

ママ：“？”その意味が分からないのか、回答無し。

娘も同じ問いかけをするが、困惑した顔をするだけ。

再度私から説明するが、悲しそうな表情をするだけで、答えない。

先生の説明通り、判断能力も低下しており理解できないのであろう。もう、残りの家族の意見を纏めるしか無い。

息子は“もう楽にさせてやり。”とはっきり言う。

娘と私は、ことここに及んでもまだまだ未練があり、決めかねていた。

当初から家内の意志をはっきり確認していたので、何よりもそれを優先することに決め、断腸の思いで主治医に延命処置の拒否をお願いする。覚悟はできていると強がりを書いてはいたが、切なさ一杯の選択であった。

“始めっから言ってたでしょう。格好悪いから、いらんことはしないでね。

何をウジウジしているの！ 覚悟を決めなさい。覚悟を！”

自分の気持ちをストレートに物言う家内が、窘めるような口調で私の耳元で囁いたように感じ、思わず家内の顔を見る。

もう今更、繰り言をいっても仕方あるまい。

いよいよ正念場である。

## - 終章・正念場 -

ちょっと状態がよくなってきたのか、人との対応も出来るようになり、お見舞いの客とも笑顔で対応していた。

私ども家族も一日中べったりとはゆかなかったが、時間がある限り病室に詰め、色々話をする。もうそれ程込み入った話しは出来なかったが、欲しがるものを飲ませたり、爪を切ってやったり、髪を梳いてやったり、微熱が続いていたので頭を冷やしてやったり、家内の全てを記憶に留めておこうと、できるだけスキンシップの時間を持った。

大好きであったショパンの曲を常に流し、心穏やかな時が流れるように配慮した。

調子の良いときの他愛のない会話を少々。連続したものではなく、断片的なものです。

娘：(私を指して)「これ、誰？」

ママ：「まさお！」　パパと呼ばず、呼び捨てである。一瞬ドキッとする。

ママ：“ やよい、かわいい！”

娘：「 のぶは？」　(のぶとは、兄のことである。)

ママ：「 のぶもかわいいよ”

娘：「 のぶとやよい、どちらがかわいい？」　(意地悪な質問である)

ママ：「 、やよい”　(勿論、兄がいない時の会話である)

パパ：「えらく色白になったなあ。」

ママ：「 ”　(痩せ細った自分の腕や手を、しげしげ見る。)

パパ：「昨日は、やよいの手作りで豪華な夕食やったで。レストラン並やった。”

娘：「やっぱり難しい。ママみたいに、うまくゆかない。”

ママ： にっこり笑う。

ママ：(私に向かって)「キスしよう”　応じてやる。(子供の前であろうと構わない。)

娘はホッペを出す。息子も同様にする。嬉しそうであった。

パパ：「ちょっと眠たくなってきた。”

ママ：「昨日、あまり寝てないんでしょう。”　と、私のことを気遣ってくれる。

ママ：「ショパンは、ミステリー”　と、突然つぶやく。　娘と私、「??? ”。

ママ：「あのね～ ”　と、何か言いたげであったが、意味不明。

ママ：「みんなどこ行ってたん？」　どうやら在宅しているものと、勘違いしたらしい。

ママ：「お風呂わかしといてね！」　止むを得ず、“ウン ”と答える。

自分の現在位置が、分からなくなってきたみたいだ。

もう少し会話があります。

私が、甲斐甲斐しく顔や手を拭いてやっている時の、母娘の会話。

娘：“爺やが、世話をしているよ。”

ママ：“こんな人を、捕まえなくっちゃ!”

娘：“わかっているよ!”（母娘のすごい会話である。私は、爺やに徹する。）

娘：“あのね、私、明日サントリーの第一次面接を受けるのよ。すごいでしょ。”

ママ：“すごい、パパより”（何を言わんとしているのか、すぐ分かった。）

考えてみれば、娘は就職活動の重要な時期であるのに、よく頑張っている。

ママ：“これ何て曲？”

娘：“ショパンのノクターン8番、私が松方ホールで弾いた曲よ。”

ママ：“オオー”と目を丸くする。（そういえば、そんなこともあったなあと、思い出す）

看護婦さんに、私のピアノが聴きたいと言っていたそうであるが、とうとう間に合わなかった。

断片で書いた会話は、比較的体調の良かった4月中頃から末頃までのことである。

今持って不思議なことは、最初の入院から最期の最期迄、終始一貫して“苦しい”“辛い”、“悲しい”というような弱音を吐かず、殆ど涙も見せず、私に対しても恨み事一つ言わなかったことである。

家内は普通の感情を持った人間で、人並み以上に喜怒哀楽を表し、本音で生きて来たはずなのに、このことはどう理解すればいいのか、ずーっと考えていた。

死と隣り合わせ、直視し、散々苦しんだはずであるのに、どういうことなのか、単に私が鈍感なだけなのか？。否、そうではあるまい、くよくよするような生き方を好まず、嘘をつかれることが絶対にいやな性格で、私もその生き様に賛同し、家内を裏切るようなことはしなかった。告知後全てを受け入れ、悲しみを乗り越え、天性の明るさで人生に終止符を打ったのであろう。

凡人である私が、やっと家内の非凡さに気が付いた。何と愚かなことであろう。

最期の入院（4/4-5/5）の間で、4/28（金）一日だけ誰も見舞いに行けなかった。

それを境に、容体は急速に悪化して行った。

そのことに気落ちして、諦めたとは思いたくないが、非常に残念に思っている。

4月29日（土）妹夫婦、仲良き仲間て敬愛しているF夫妻がお見舞いに来られる。

37度より熱が下がらず、少々朦朧として対応するが、精一杯の笑顔も弱々しく、言葉も少なくなっていた。

喉のところにも何か出来ているらしく、水分も取りにくそうであった。

今となって、その処置は無理らしく、主治医からも説明無し。

4月30日(日) 軽眠傾向が強くなって来て、半分寝て居る状態で反応悪し。

時折目を開けるが、焦点定まらず。常に氷枕をしている。薬による下熱は、体温を下げ過ぎるので、使用しないとのこと。持ち込んだ氷で冷やしてやる。家族の看護の張り合いも、段々薄れて行くのが分かる。

5月 1日(月) 夜の8時頃の見舞いとなる。熱 37.6℃。息苦しそうに、肩で息をしている。

娘が、「ママ、大丈夫？」と問いかけると、「うん」と力無く頷く。

決して大丈夫な筈は無いのに、家内の口癖になっていた。

お茶を欲しがりと与えるが、喉に引っ掛かり咽せる。大層苦しそうである。

5月 2日(火) 39度近くの発熱。下熱用座薬をいれてもらう。肺全体を覆っている癌細胞の影響で、発熱している。食事を取れないので、点滴で栄養補給する。

上半身全体を使って呼吸をする。時折虚空を掴むかのように、腕を伸ばす。喉に痰がからむが、自力で排除出来ないため、幾度となく看護婦がバキュームで吸い取る。苦しいのか、その管をかみ切ろうとする。

目を見開いて何か言おうとするので、口元へ耳を近づけるが、聞き取れず。主治医が来られ説明を受ける。

「この2, 3日が山だと思われまますので、ご親族の方々に連絡を取ってください。持ち直すかも知れませんが、念の為に連絡下さい。」

いよいよ来るべき時が来たのか、どうしようもない不安で一杯になる。

病室での寝泊まりは許されなかったので、看護婦に後を頼み、病院を出る。横になるが、家内の姿が脳裏に焼き付き寝付かれない。

明日には熱も下がり、意識も戻り、きっと良くなっていると、自分に言い聞かせ、不安を解消しようとするが、どうしても落ち着けないまま、朝になってしまった。

5月 3日(水) 私の願いが通じたのか、熱が下がり(37.3℃)持ち直したようだったが、喉の

腫瘍のため気管が狭くなっており、痰もからむため、水分、食べ物を一切禁じられ、点滴による栄養補給と同時に、苦しみ緩和のためモルヒネの投与が始まった。気管確保のために首の下に枕を置き、首を伸ばした体勢にされていた。

一度意識が戻りかけたが、モルヒネの影響か意識がはっきりせず、皆の呼びかけにも反応せず。

高熱と呼吸苦の断末魔の中で、必死に闘っている姿には目を覆いたくなかったが、その悲壮美に打たれ、片時も目を離すまいと凝視するばかりであった。心配であったが、看護婦に促され深夜に病院を辞する。

一度だけでいいから、言葉を交わしたいという強い願いが心の中で渦巻き、病院へ引きかえそうとする衝動を必死でこらえ、辛い帰宅をした。

この夜も眠れず、電話を枕元に置き、横になってあれこれ考える。

「いよいよ正念場だ。じたばたせず、覚悟を決めろ！」と、声が聞こえる。

5月 4日(木) 相変わらず熱が下がらず無意識のまま、右肺の状態が非常に悪いとのこと。

上半身を精一杯使って呼吸するが、その運動の何回に一回かの割合いで、無呼吸の状態があり、一瞬ハッとさせられるが、また動きが戻るといふ繰り返してある。

「ウン、ウン」と、低いうなり声も発するようになり、必死で闘っているのが轟々と伝わってくる。

再々看護婦が血圧、血中酸素濃度、体温、心拍数を測り、刻々と変化する病状をチェックする。痰の排除も口から出来なくなり、鼻からチューブを通すという姿を見るに忍びず、私はいつも部屋を出る。

病棟の裏庭でタバコを吸いながら、この苦しかった一年を振り返り、何もしてやれなかった自分の非力さに、無念の涙がこぼれた。

もしかして病状が落ち着いて、何か話ができるのではと病室へ戻るが、何も変わらず。唸り声が、高くなったり低くなったり、荒い呼吸の音が聞こえるだけである。どれだけ効果があるのか分からないが、頭に当てた冷たいタオルを頻繁に変えるだけしか、してやれることがなかった。

時折「ママ、がんばれ!がんばれ!」と耳元で叫ぶと、「うん」と返事したような気がして顔を見るが、それは唸り声の錯覚と気づき、悄然となる。

全てこのまま終わってしまうのではと思うと、居ても立ってもおられない焦燥感に苛まれる。まだ覚悟が出来ていない自分が、情けなく思えた。

「何かあれば連絡します。」との看護婦の声に、思いを残しながら病室を去る。

家内の告知以後、「夫婦で一体何なんだろう?」、「人の一生とは?」と考え続けてきた。我々夫婦は一緒になって27年目に差しかかっている。

思い返せば、家内の半分の人生は私との結婚生活である。

30歳の年に、サラリーマン生活に訣別し、家内の実家の商売を引き継ぎ、それ以来24時間一緒という生活になった。

当初は家業を引き継ぐことを嫌がっていた家内も、我が家の生業であるという自覚をしてくれ、良き片腕となり、家事、子育てとよく奮闘してくれた。人並みに喧嘩もしたが、概ね仲良き夫婦として過ごした。

私の我が儘も受け入れてくれ、我が身を飾ることも無く、家族を守る事に精出し、一生懸命に生きてくれた。もう2、3年もすれば子供も巣立ち、なんとか楽にさせてやれると思っていた矢先の異変である。

仲良き熟年夫婦を見るにつけ、我々ももうすぐその域に達することが出来る喜びを感じ始め、私は少なくとも良きパートナーに恵まれた幸せを実感していた。苦しい毎日も、家内の存在がそれを癒してくれ、張り合いがあったのに、何という事だ。どんな姿形になろうとも、生きていてくれと祈る。

5月 5日(金) '子供の日' 快晴、そよ吹く風が心地よい日であった。

あさ10時、担当看護婦より電話。容体悪化、すぐ来いとのこと。  
待機していた家族、姉妹が急いで病院へ向かう。

病室に入ると心電図検査の機械が搬入され、緊迫した空気が満ちていた。  
血圧低下、脈拍数低下、39度の高熱、顔が動くため酸素マスクをテープで  
止められ、濃縮酸素濃度も8ポイント迄上げられ酸素を供給されているが、  
昨日までと違って呼吸する力も弱っており、その間隔も緩やかになっていた。  
主治医が耳元で囁く、“今日、明日が山でしょう。”  
そんなはずがないと必死に否定するが、目の前の現実が私を打ちのめす。  
高熱なのに、手や足はぞっとするほど冷たくなっていた。

心労で弱っていた母親を面会させるかどうか迷っていたが、今しか無いと  
思い、連れて行く。見るなりはらはらと落涙、変わり果てた我が娘の姿を見  
せるに忍びなかったが、今生の別れである。  
とても耐えられそうになかったので、すぐに帰宅してもらおう。

午後4時過ぎ頃より、さらに悪化。心拍数が90を切りだし、心電図の波形  
の凹凸の線が平坦に近くなって来るのがはっきり確認でき、更に緊張が増す。  
やがて大きく揺れ動いていた頭の動きも殆ど無くなり、必死の形相も穏やか  
さが戻り、苦しんでいた口元も優しさを取り戻し、一息大きく吸って、力つき  
たかのように静かになる。

‘ママ、ママ!’と叫べど、反応無し。皆がそれぞれの思いで叫ぶが、反応無し。  
心電図の波形も一直線になり、ピーッと空しい連続音を発するだけ。  
もう私にも起こった事態が理解できた。

口、鼻を覆っていた酸素マスクが、ものすごく忌まわしく思え、思わず  
“取ってやれ!”と怒鳴ってしまった。

突然心電図が波を描き、あわてて着けると、心なしか口元が動いたよう  
に思え、大声で‘ママ!ママ!’と叫ぶ。

触れた顔はまだまだ熱く、終焉を迎えたとは信じ難く、体を揺する。  
子供達も、‘ママ!’、‘お母さん!’と大声で泣き叫ぶ。

‘5月5日、5時20分、お最期です。’後ろで、主治医の音がする。

家内の目元からは一筋の涙が流れ、無言の別れを言っていた。  
コードボールが、一瞬ためらい、やがて静かにポロリとあの世へ落ちるが如  
く、静かな最期であった。



熱き涙が止めどなく流れ、喚くように「ママ、よく頑張ったね。本当に、よく頑張ってくれた。ありがとう。本当に、ありがとう。」と言い、その笑みを含んだ口元に、お別れの口づけをしてやる。

長い苦痛から解き放たれて、穏やかな微笑みを浮かべたその顔を見詰め、最期の最期までファイターであった家内の頑張りに、神々しささえ感じ、惜みない拍手を送ってやった。

程度の差はあったとはいえ苦しみを分かち合うことができ、この一年余り一生懸命に共に生きることができた歡びに感動を覚え、心で詫びつつも「さよなら。」を言ってやった。

「G o o d b y e M y S w e e t h e a r t ! 」

それにしても良き日を選んだものだ。

ゴールデンウィークの真っ最中、家族は勿論、姉妹一家も心置きなく見守れ、家内が精魂込めて育てたチューリップ、スイートピー、ピンクの薔薇も彼女のフィナーレを飾るかのように真っ盛り、頬にあたる緑の風も優しく、窓から差し込む五月の陽も家内の顔を優しく包み、悲しみよりも劇的なものを感じさせ、彼女らしい素晴らしい演出で幕を引いた。何か晴れ晴れとした感動だ。

もう何も考えるまい。

苦しさも、悲しさも、辛いことも、悔いることも、全てが終わってしまった今となっては。そんなことは、ほかの人にまかせておけばいい。

彼女が身を持って教えてくれた生き方、素直で、明るく、困難に立ち向かう勇気、嘘を嫌い、プライドを持ち、人の気持ちが分かり、正義感が強く、我慢することも良く知り、それでいて涙もろい人情家で、純真無垢そのままの子供の心を持ち続けた人生に、心から大きなエールを送ってやろう。

“定命”を悟った後、医師の宣告などものともせず、長生きの記録を更新してやると宣言し、自らの生命力で生き延び、見事に散って行った家内を私は誇りに思います。

家内の人となりをご存じのかたは、決して悲しまないで下さい、あなたのご存じの通りの素晴らしい人生を終えたことに、惜しめない拍手を送ってやって下さい。いつまでも、あなたの“キミちゃん”です。

彼女と知り合って“身を焦がす恋”を知り、とうとう燃え尽くしました。

去り行く人は知るや知らず、“わが恋は終わりぬ”。

「生前の家内に対するご厚情、心より感謝いたします。」

## = 帰宅・通夜・葬儀・あとの祭り =

5月 5日(金) 午後7時 無言の帰宅。

きっと存命中に帰りたかったであろうが、やむを得なかった、冷たくなった家内に詫びる。笑みを浮かべた、本当にいい顔であった。

“ やっと帰れたね、ママ。” と、かすかに暖かみの残った顔を撫でてやる。

夜各方面へ連絡。葬儀屋、お寺、葬儀会場など、慌ただしく手配する。  
ゆっくり死を悼んでやる間もなく、時が過ぎて行く。

斎場の休日や友引などが重なって、通夜が8日(月曜日)、葬儀が9日(火曜日)となり、自宅での仮通夜が3日の長丁場となってしまった。

家内が乳母がわりとなった甥(3人)や家族が交替して賑やかに通夜番をし、家内も喜んでくれたであろう。

式までの段取りが完了し少々時間が出来たので、遅すぎた約束であるが追悼の演奏会を開催、家内の好きであったショパンを数曲、心を込めて供養してやった。時間の余裕が出来たときに、聞かせてやろうと密かに練習していたのに、とうとう間に合わなかった。 残念の一言である。

5月 8日(月) 午後7時より、篠原会館で通夜。

平日の夜にも拘わらず、100人余りの方にご列席頂き、有り難かった。

5月 9日(火) 午前11時より葬儀式典。 12時出棺。

沢山の方にお花を手向けてもらい、涙を堪えることができなかった。  
本当に最後の別れ、“ ママ、さようなら。あの世で、お花に囲まれてゆっくりしてくれ。ごくろうさま。さようなら。” と言いつつも、別れ難く万感の思いが胸を突き上げてきて、大声で泣き叫びたいのを必死で堪えた。

午後3時 骨揚げ。

とうとう骨になってしまった。なんと無愛想なことよ。骨となってしまっ  
は、何も面影など有りはしない。家内の全てを消し去れということか？  
とんでもないことである。怒りにも似た思いが、沸々と心の中で渦巻く。  
いけない、いけない、もう何も考えない筈ではないか。そんなことでは、家内も  
浮かばれまいと、心の中で葛藤する。

未練たらしく、往生際が悪いとは思いますが、簡単に割り切れるものではない。  
純白の骨を拾い上げるが、とても家内とは思えない。 もう止みましょう。

午後4時より最後のお経を上げ、初七日も済みます。

疲れ切った5日間を無事終える。関係された方々、本当にご苦労様でした。

## = 追憶 ・ 良き思い出 ・ 恋心 =

もう少し語らせて下さい。

人と人との出会う縁（えにし）とは、本当に不思議なものです。

大阪生まれ、大阪育ちで大学も大阪という私と、神戸育ちで神戸の短大を卒業、神戸勤務で働くという彼女、かたや貧乏学生、かたや一流会社のキャリアウーマン、接点などどう考えても有り得なかった。

これからが、不思議な物語の始まりです。

当時、私は普通の大学生、住んでいたのは大阪北部茨木市というところで、神戸とは距離的にも離れ、何の変哲もない片田舎であった。大阪のことは良く知っていたが、神戸のことなど東京と同程度の知識しかなかった。ただ何かしら小さき頃より、漠然とした憧れを持っていた。小学生の時に、父のダッジ（外車です）で阪神国道を走り、六甲山へドライブをして、感受性豊かな私は何かに感銘を受け、幼心に憧れを焼き付けたようです。

大学3年生の時、父親の会社が左前、家庭も崩壊、一家離散という悲しきことになる。一人っ子の私は、どちらの親にもつかず独立することになった。とはいっても、稼ぐことなど知らず、卒業後は父よりの援助を受ける。要は頼りなかつただけで、複雑であった家庭とも縁を切りたかっただけである。しっかりした独立独歩のスタートではなく、親がかりの甘えた一人生活を始めたのである。

取り敢えずは下宿捜しとなった。常識的に考えれば、大学（吹田市）の近くに求めるはずである。が、ずっと両肩に重くのしかかっていた全てのことを振り払いたくて、無謀にも憧れの神戸に居を構えたくなり、迷惑であったと思うが旧友のO君を頼り、現在私が住んでるすぐ裏の下宿に落ち着くこととなった。

運命の糸に手繰り寄せられたというか、ここからが全ての始まりであります。

父の事業の跡取りをすると勝手に決めつけ、甘い考えしか持っていなかった私は、勝手な夢も潰え、学欲に燃え一流会社に入るなり、稼げる資格を取るなりしなければ成らないのに、どうにも意欲が湧かず、自暴自棄になっていた。とはいえ悪に走るほどやんちゃな性格ではなく、自閉症気味で今風の“フータロウ”になっていた。

まあどうしようもない時代でした。お陰で卒業に手間取りました。（意味の無い留年）それでも何かを捜し求めていた私は、神戸の町ともマッチしたジャズにひかれ、幸いにも親のお陰で幼き頃より慣れ親しんだピアノにも自信があったので、その方向に進もうと野心を抱き、スクールへ通うことになった。この頃だったと記憶するが、英会話にも目覚め、個人レッスンを受けるため、なんやかや理由づけして親に出資してもらっていた。ぼんぼん気質の抜けない金食い虫で、親には大層な迷惑をかけたと思う。

いつも腹を空かせていたこの時代、空腹を満たすためには何かアルバイトをと思い、彼女の実家である酒屋（現在私が後継している）へふらりと立ち寄ると、たまたまバイト募集中、力仕事と客商売の嫌いでなかった私は、即採用、運命の出会いに一步近付いたわけである。彼女の実家とは言え勤めに出ているため、まだまだ対面までは話は進みません。（これまでに色々なバイトを経験し、よく稼いだのですが、何に使ったのか、よく覚えていない。ほとんど飲み食いに消えていたのだろう。）

そのうちピアノの腕を見込まれて（？）下宿近くのお洒落なレストランのソロピアニストとしてデビューすることとなる。かっこよく描いてはいるが、単なるにぎやかしのための楽士である。もっとも狭い下宿のためピアノなど無く、オーナーと交渉、オープン前に練習をと条件をつけた。やってみると意外と高収入、おまけにオーナーの奥方のピアノ教師として個人レッスンを依頼され、羽振りもよくなる。

演奏の合間の休憩時には、厨房に入り込み料理など覚えればよかったのに、奉仕で皿洗いなどの手伝いをする。そのお陰で、チーフ以下コックさん達とも仲良くなり、後々私共の披露宴のパーティーを豪華に盛り上げて頂いた。何が幸いするか分からない。

多分その頃には、酒屋のバイトをしていなかったように思うが、まだまだ彼女は登場して来ないのである。

私が通っていた大阪のジャズスクールが神戸に開設され、同じ先生がそこでも教えることになり、転校することにした。これが運命の出会いの場所となった。

彼女の実家（私の下宿と目と鼻の先）でバイトしたとはいえ、一度も面識などなく、わざわざお誘いの場所を設定してくれるとは、運命の女神も粋なものである。

開設当初の神戸教室はまだまだレベルが一定せず、来るところを間違えているのではと思える輩も多く、もっと勉強しておいでと偉そうに先輩面して教室へ出入りしてた。

ある時、先生におちくられ半泣きのべそをかいて飛び出してきた女性がいた。ちょっと気を引く女性であったので、はずみで声をかけてしまった。

弁解しておきますが、私は決してやましい下心を持ってスクールへ通っていた分けでは無く、純粋にジャズの魅力に引かれ勉強していたので、誤解されませんように。

その魅力溢れる女性と偶然（？）帰り道が一緒になり、話をしているうちに実家も判明、話も弾み打ち解けてしまった。“それでは一度、私のピアノを聞きにおいで。”

といいかっこをしてしまったが、相手は一流会社につとめるキャリアウーマンで、冴えない学生ピアニストの私の演奏など聞きに来る訳はないと期待はしていなかった。

（それまで私も人並みに惚れることもあったが、恥ずかしながら、全て片思いに終始し、きっと女性には縁がないものだ、諦めた生涯を通す予想をしていた。）

ところがですよ、現れたのです彼女が！私はここぞとばかりに心を込めて演奏をし、彼女をうっとりさせ（？）、まるでドラマ仕立ての一夜と成りました。

もうお分かりでしょう、彼女こそ我が家内となった人です。記念すべき運命の日です。他に何も無かった私に最高の舞台設定をしてくれ、光り輝かせてくれた幸運の女神にどれだけ感謝したことが、究極の至福を感じました。

ちょっと羽振りの良かった私は、彼女の前では鷹揚な金持ちのボンのように振る舞い、実生活ではいつもピーピーしているといったアンバランスな生活をしておりました。

高収入といってもアルバイトですから多寡が知れており、社会人であった彼女のお相手をするのは冷や汗かきかきでした。優しい彼女は、既に私の演技を見抜いていたらしく、お金のかからないよう気遣いしてくれ、何とか面目を保てました。

最初は彼女の方が私にのぼせ上がり、その積極性に晩生(おと)の私はたじたじになっていたが、やがてその炎が私にも燃え移り、傍迷惑な程の大火になっていった。

比較的クールな私も"身を焦がすような恋"に溺れ、彼女の虜になってしまったのである。

嫉妬深くなり、猜疑心が強くなり、真面目な性格だけに、自分の変わりようにどうして良いのか分からない苦しい、切ない日々の連続であった。

厚かましい表現になるが、純粋な二人がまるで純文学のような純粋な恋に落ち、"近松門左衛門"の作品に出てくるような締め付けられるような恋に進展していった。

片方が逃げるような素振りを見せれば、片方が必死で追いつけるといったような恋する苦しみも知り、熱烈恋愛の関係になっていったのです。

包み隠さず申し上げますが、この思いは連れ添っている間、最後まで変わることがありませんでした。多少の山や谷は有りましたが、最期の最期まで彼女の魅力は色あせることはありませんでした。

やがて私も無事就職が決まり、神戸の地を離れることになった。

研修を愛知県で終え、任地も大阪と決まり、彼女を伴侶にと思い始めていたので、やっと対等に付き合える喜びと自信に胸躍らせていた。それまでの"しがらみ"を切り捨て、夢と希望に燃えていた24歳の年であった。

その頃には、堂々と彼女の家に入入りし、確約した仲ではなかったが、お相手として彼女の家族にも認められていた。

身分も安定し、甘い熱烈恋愛の時期から次の段階へ進めるべく責任を感じていた私は、ちょっと不安も感じつつあった。

結婚となれば、当事者の二人だけの問題でなくなり、家と家の問題になるのは明白であり、それ相応の格式を持って彼女のご両親の許しを貰わなければならない。

お互いに好き同志であれば駆け落ちでもして、一緒になればいいではないかという打算的な考えも世間一般にはあるが、大事に思っていた彼女に肩身の狭い思いをさせたく無く筋を通すべく思い悩みはじめる。

何も問題無き家庭であれば親が出てきて、すんなり話が進みハッピーエンドとなるのであるが、私の不安というのはそこにあったのである。

先に書いたように崩壊してしまった私の家庭では、彼女のご両親が望んでいたような形を取れなく、壁に突き当たってしまったのである。

私と私の父との問題で、父より提示された条件をどうしても受け入れ難く、対立したまま孤立してしまった。

事業に失敗し、私とも充分対話する事なく傷心のまま田舎（沖縄）に引きこもってしまった父親の条件とは、「彼女と一緒にいてもいいが沖縄に連れ帰ること、それとも沖縄の

女性と結婚すること"であって、当時の私にはとても承服できるものではなかった。

沖縄では連綿と続いた由緒ある家柄で、その家を守らなければという父の思いも理解できなくはなかったが、今となっては形骸化してしまった家系を守るという義務感に捕らわれることに私は猛反発して、お互いに歩み寄ることはなかった。

恩義ある人であったが頑固一徹の父に対する反感と、やっと独立できた自分の力を信じ甘い考えを捨て何とかこの難関を乗り越えようと、苦境に立ち向かう決断をした。

とはいえ、確固たる基盤も無く、まだまだ経済力も無く、頼みは彼女の心だけであった。

何度か破局の危機を迎えたが、彼女が支えてくれ、友人達の暖かい応援もあり、いよいよ結婚できる目途がたったのは26歳の年であった。

まだまだ格式を重んじる彼女の父親の手前、仲人を立て、こちらの親代わり（何かへんですが）の挨拶もしなくては、形になりません。

仲人の方は、私の大親友のM君のご両親に事情を話したところ、よくご理解戴き、快く引き受けて戴いた。ところが問題は親代わりを説得することです。これまた込み入った話となるのですが、唯一頼めるのは大阪在住の叔母のみで、最後の一手を決めるべくお願いに参上した。叔母は父の姉にあたる人であったが、腹違いであったため余り仲良く無く快くは引き受けてくれなかった。熱意を持って何度か足を運び、やっと出向いてくれるところまで漕ぎ着け、挨拶して戴いた。

よたよたしながらも結婚までたどり着き、苦難を乗り越え思いの人と一緒にになれる喜びは、これ以上のものは無いといった最高のものでした。お骨折り戴き、私を男にしていただいた方々には、言葉では言い尽くせない程の感謝の念を生涯忘れることは出来ません。

何と云っても、諦めずに最後まで着いて来てくれ、一緒に思いを遂げてくれた家内の心根に強く打たれ、一生涯を共にする決意をより強く持った。

新生活へのスタートは決まったのだが、はたと困ってしまったことがあった。

それはお金、つまり“結婚資金”が無いということである。勢いで無謀とも思える結果にまで辿り着いたのだが、入社2年目の安サラリーマン。会社で借りるのには、まだまだ信用が無く、今ほど簡単にはお金を借りることもできず、父に大見得を切った手前泣きつくわけにもゆかず、ましてや彼女の懐具合を頼るなど出来る分けなく、さてどうしたものかと、またまた悩む。「一難去って、また一難」と言ったところですか。

とにかく結納金までは算段出来なかったが、私の変わらない愛の印としてエンゲージリングをと思い、当時の私としては精一杯の小遣いをはたき真珠の指輪をプレゼントした。

嬉しいことに、家内はそれを後生大事にしてくれ、事あるごとに指につけたくれていた。

次なることは、新居を借りるための敷金作り。これは彼女との折半となったが、私はこれまた大親友のM君にボーナス払いの条件で借用した。金の貸し借りで友情を潰すことは良くあることだが、今も大親友のままである。私の奔走もさることながら、良き先輩、友人に恵まれて、本当に幸せ者です。一人では何も出来ないという実証です。

本当にそんなことでよく結婚できたなあ、ご批判を受けるのは覚悟しておりますが、若気の至りというか、時の勢いというか、私に天の利があったということでしょう。

さて嬉し恥ずかしの結婚式となるのですが、今までの経緯上(いきさつ)何かと肩身の狭い思いのする国内を避けて、いっそのこと海外でと彼女がプランニングをしてくれ、晴れがましくもドイツ・ハイデルベルグ城のチャペルでの挙式と決定。

この結婚式の手配をしてくれたのは、私が出宿を決める時にお世話になったO君。

たまたま彼は留学中で、式場選択、牧師さんの手配と親身になってやってくれ、出会いから結婚式まで世話になり、私共の福の神というか、今でも頭の上がらぬ大恩人です。

お金も無いのに大それた計画をと、お考えになるのはごもつとも。

ここからが私のシンデレラボーイの神髄です。

日本航空に勤めていた彼女のお陰で、特典を最大限に生かし、航空運賃は全て口八。

宿泊についても、旅行慣れした彼女の計画はパーフェクト、はた目には豪華旅行でしたが、中味は意外とケチケチ新婚旅行の始まりで、財布の中味を気にしながらの旅行となる。私にとっては初めての海外、それも憧れのヨーロッパとあっては天駆ける思い。

幸いなことに、彼女の姉夫婦がドイツへ勉強のため留学、力強い身内との同行となった。

フランクフルト空港へはO君が出迎えてくれ、久しぶりの再会に涙するものがあった。

晴れての結婚式は由緒ある古城、アルトハイデルベルグ城のチャペルで厳かに執り行われ、列席者は姉夫婦、その長女、O君、それと彼女の同僚がわざわざフランクフルトより駆けつけてくれ、細やかではあったが、緊張の中にも喜び一杯の感動に溢れるものとなった。

牧師のご配慮で、地元高校生の楽団と合唱隊が祝福の演奏を披露してくれ、喜びも倍増、最高の式典となった。

その夜はネッカー川(?)の見える格式あるホテルにて、牧師夫妻、ボランティアの高校生も呼び、楽しい披露パーティーを催し、忘れ得ぬ一夜となった。

ハネムーンの大半はロマンティック街道沿いの旅となり、これもO君がお膳立てしてくれ、ライン川沿いの古城に泊まったり、整然とした中世の面影を残す街を見物したり、ノバインシュタイン城(白鳥城)、ヒットラーが旗揚げしたホッフプロイ、次から次へと名所旧跡巡り、そこら中が旧跡だらけでガイドブックを持って行っても照合するのも疎ましくなり、その強行スケジュールには音を上げてしまった。

勿論ケチケチ旅行のため、O君の“カブト虫”を運転手付きでチャーター、3人での楽しい新婚旅行の道行きとなった。行き当たりばったりの安宿探しで、優秀なガイドのO君が腕を發揮、計算通りの旅費で済ますことが出来、万々歳であった。とどのつまりには彼の下宿にも泊まり込み、何とも迷惑なことをしたもんだ。楽しかった思い出である。

贅沢な旅であったが、馴れぬ土地での心労でクタクタになった私はとうとう爆発。

素晴らしい思い出となるはずであったウィーンの街で初めての夫婦喧嘩、宿を飛び出した私は迷子になってしまい、ちょっと恥ずかしい思いをした。

旅の最後はウィーンからパリまで、エールフランスのファーストクラスを利用でき、マキシムの機内食を満喫し、いけないことだが記念にAFと入った銀のスプーンを黙って頂戴し、大いに満足した。このスプーンは未だに当家にあります。返還要請があれば喜んで応じるつもりであったが、鷹揚なるフランス国からは未だに要請なく、当家のお宝になっている。それを恩義に感じ、当店ではフランスワインを主力に売っておりますが、どうも大いなる感違いをしている様です。後程彼女から聞かされたのですが、どうも旅行者の手違いで、場違いの我々がファーストクラスに迷い込み、好い目に遇ったようです。一つ間違えれば大枚をはたかねば成らないところのようでした。確かドンペリのシャンペンも遠慮せずに空けた記憶も残っております。思わぬ余禄となりました。フランス万歳！

大きな顔をできないの只乗りの客であったため空席が取れず、思わぬパリでの一泊となり、パリの街の散策もでき、“ホワイトホース”というレビュー小屋に入り、素晴らしいマドモワゼルの全裸デビューを見たときには、新婦が隣にいるのに強烈なショックを受け、だらし無く口をあぐり、鼻の下を伸ばし、後でピンタを食らう破目になりました。

パリという街の雰囲気させるのか、知らない土地での解放感からか、熱烈な恋人同士に戻り、大いに楽しみました。詳しいことは二人だけの内緒です。

慌ただしい新婚旅行も無事終え、神戸の地に帰り、披露宴を催うすこととなった。この手配も大親友のM君とNさんが、万事遺漏無く進めてくれ大盛会となった。本来であればご招待といったところであったが、恥じかきついでには言葉が悪いのですが、当時としては大枚の会費を頂戴し、多数の友人、先輩にご臨席頂いた。

会場は私がデビューしたレストランで、可愛がって頂いていたチーフの肝入りで予算以上の豪華なパーティーを設えていただき、皆さんの祝福を受け、誠に嬉しく思った。

昭和47年11月5日(日) 私26歳、公子25歳の時であった。

(結婚記念日は、昭和47年9月22日である。)

今思い返しても、わくわくする良き思い出である。残念なのは、話し相手が居ないことである。家内の写真を目の前にして、話しかけながらキーボードを叩いています。

結婚翌年には早くも長男誕生。子供を抱えながらの大阪支店のシフト勤務をこなし、育児と仕事を両立させている家内を素晴らしく思い、またまた惚れ直しました。

おのろけを言っているのではなく、一生懸命家庭を作ろうとしているその真摯な姿に心打たれ、私の素直な気持ちが出たのです。まだまだ私は学生気分が抜けない青二歳で、家長としての自覚も乏しく、家内の“生きている”という姿には頼もしさを覚えるとともに尊敬の念を持った。母となった女性の生きざまは凄いと圧倒されたのも、この頃である。

私と父親との関係は、歩み寄ることなく対立したまま冷戦状態であった。孫の顔でも見せれば、何とか和解できるのではと考えていたが、長男が生まれる直前に56歳の若さで急死、何ともあっけない別れであった。父と十分に話し合いのできる機会が目の前に見えていたのに、非常に悔しい思いをした。とうとう家内とも会わずじまいであった。



三十路を迎える少し前頃、三人姉妹がそれぞれ結婚して家を出てしまい後継者のいなくなった家内の実家の酒屋を他人に譲ってしまおうという話が持ち上がり、宮仕えに飽き飽きしていた私は色気を出し、家内の反対を押し切って後継者となることにした。

自分の時間を持てること、転勤などで家族と離れるのが嫌であったこと、小さくとも一國一城の主と成れること、リスクも大きいがやればやるほど自分に還ってくること、商売が好きであったこと、色々な企画を思い通りに出来ること等々、要は束縛されるのが何よりも嫌で気ままにやりたかったのであるが、一番の理由は神戸が好きであったことである。

それに家内は神戸が一番似合っている女性であったし、私の人生の再出発の土地でもあったので離れ難かったのである。

三十歳の年に退職、いわゆる“脱サラ”である。

阪神間の人気の土地柄であったため住宅も増え、頑張れば頑張るほど成果が上がった。

バブルが崩壊し、阪神大震災でダメージを受け、規制緩和で揺さぶられ、平成の大不況で悪戦苦闘中であるが、家族の団結で苦しいながらも維持でき、今日に至っている。

子供達も成人し社会へ巣立つメドも立ち、もう少しで家内を楽にさせてやれたのに、口惜しい限りである。この20年余りの頑張りは、家内を消耗させただけの結果になってしまった。

後継してからの23年間は、24時間一緒であるという生活であったが楽しかった。

夫婦間の山や谷は何度もあり、口もきかない時も多々あったが、お互いを尊重し、尊敬し、良きパートナーとして認め、第2の青春を謳歌できると期待していたのに、何とということか、言葉もない。あとは付け足しの人生で終えてしまうのであろうか。

男の身勝手というか、自分が先立つものと決め込んでおり、心の準備もそうしている。

壮年にさしかかると、そのシナリオは決定的なものになっており、変わることは無いと思ひ込み、今までの（家族に対する）罪滅ぼしを始めるのである。特に奥方に対してはその思いは特別で、表現方法は色々であろうが、心を尽くし、又奥方もそれによく応え夫婦は完成するものと、齢五十を越えた私は常々考えていた。

“おまえ百まで、わしゃ九十九まで、ともに白髪がはえるまで。”

こうなるものだと思ひ勝手に思ひ込み、別の筋立てなど夢にも考えることはなかった。

親より先に先立つことを“逆順”と言うらしいが、夫より先立つことも“逆順”ではないかと、笑いかけている家内の写真に向かってブツブツ語りかける。

“そんなに慌ててあの世に行かなくても、この世はこれから楽しくなるのに、慌て者！

男親の私に、娘の相談相手などできる訳ない。グレても知らんぞ！

冗談、冗談。心配せんでいい、ちゃんと面倒みるよ。君の娘や、チャーミングやで、きっと素晴らしい恋もするやろ、いい人も見つけるやろ。見守ってて、頑張るで！”

日々実体が薄れてゆく家内に、愚痴ともいえぬ語りかけをするのが日課となってしまうた。

= ひとりごと =

公子の全てを思い出そうとして、彼女の幼き頃からよりのアルバムを開いて、順を追って見ていく。

幼き頃から小学校、中学校にかけては、私と同年、物の無い時代に育って写真など殆ど無く、高校時代からのものになっていた。

これも不思議な縁で、幼稚園、小学校の時代は、私が大阪市港区で育ち、家内は隣の西区で育ち、小学校の途中から、芦屋へ転校したそう。道理で彼女のベースにあった感覚が、私の波長に合ってた訳だ。浪花の下町気質が、神戸のセンスに磨かれながらしっかり根ずいていた。どこかで会っていたかも知れないし、その時に既に二人の運命は決まっていたのかも知れない。

高校から短大にかけてのアルバムは、いつも明るく、お茶目で人気者であったことがよく分かる。丸顔でショートカットがよく似合い、闊達で親しみやすさをおぼえる垂目、額が広く「ベティーちゃん」と呼ばれていたらしい。この頃にも、会って見たかった。

JAL時代の彼女は、本当に若さというか、人生を楽しんでいる様子がよく分かる。ちょっと大人のムードを漂わせているが、お色気よりも、その健康そのものの笑顔がとてもチャーミングである。いろいろロマンスもあったであろうが、私には気にならない。私に対してくれた真心が、そんな嫉妬心を打ち消してくれる。

そんな光り輝いている時に私は彼女に出会い、光りを求めていた私は、恋に落ちた。

ギリシャ神話を愛し、源氏物語を語り、ハンフリーボガードが大好きで、お花をこよなく愛し、ショパンに心打たれ、ビートルズをよく唄い、涙もろく、人をよく愛した、私にとってこれ以上ない人でした。

この世に再生することがあれば、絶対に彼女を間違いなく選ぶでしょう。

それ程、私の心のなかには彼女が溢れている。もう涙はありません。

日常の出来事の端々に、彼女の声が聞こえ、笑顔が浮かび、励ましが感じられます。

彼女と一緒に暮らせたことで、私の人間性も高められ、音楽性も豊かになった。

そう、追悼の演奏会を開き、音楽を通じて、私の彼女に対する気持ちと、彼女の優しさを伝えよう！ 残された私の、大きな目標とし、生き甲斐としよう。

ご招待することもあるかも知れませんが、その時はお出ましく下さい。

最後に、彼女に感謝の言葉を。

“私を陰より連れ出し、共に頑張ってくれ、良き家庭を築き、素晴らしい人生を共に生きてくれ、最期の最期まで生きることを教えてくれたその生涯。

本当にありがとう。君に対する恋心は、生ある限り変わらない。

あの世では、また僕を選んでね。再会の日を楽しみにしている。ありがとう。”

おしまい

# 夢見る乙女



二十前後の独身時代  
若々一杯 魅力溢れる頃  
六甲の自宅にて

# 優しき母



三十歳前半  
愛娘 やよいとともに  
充実していた頃です



# 闘病時代



1999年自宅療養中 52歳の夏  
不屈のガンファイターのVサイン